

2 検 査 情 報

(1) 三類感染症

ア 検査対象

医師からの届出により医療衛生センターが調査し、病原体検査のために採取した検体で、衛生環境研究所に送付された表 1 に示す 201 検体について検査を実施した。なお、コレラ菌、赤痢菌、パラチフス A 菌及びチフス菌については、コレラ汚染地域への渡航者が消化器系感染症を発症した場合などに、患者、患者との接触者、旅行の同行者について検査を実施する。

表 1 三類感染症病原体検査 取扱件数及び項目数

検体数		201	(ふん便	184	, 菌株	17	)	陽性数
検査項目	コレラ菌	0	(ふん便	0	, 菌株	0	)	0
	赤痢菌	2	(ふん便	1	, 菌株	1	)	1
	パラチフスA菌	0	(ふん便	0	, 菌株	0	)	0
	チフス菌	0	(ふん便	0	, 菌株	0	)	0
	EHEC	199	(ふん便	184	, 菌株	15	)	34
合計		201	(ふん便	185	, 菌株	16	)	35

イ 検査方法

常法により直接又は増菌培養した後に寒天培地に接種し、分離菌について生化学的性状と血清反応等による同定を行った。腸管出血性大腸菌については、免疫クロマト法（以下「IC 法」という。）及び逆受身ラテックス凝集反応法による毒素検出と PCR 法による毒素遺伝子の確認を行った。また、医療機関などで検出された菌株についても、同様に同定を行った。

ウ 結果

腸管出血性大腸菌は、患者及び接触者等のふん便 184 検体から 19 株を分離した。また、医療機関で分離された菌株 15 株（疑い事例を含む）が当所に搬入され、15 株を分離した。検査を行った計 34 株の血清型及び毒素型は表 2 のとおりであった。

表 2 腸管出血性大腸菌の血清型別の検出状況

血清型（毒素型）	株数	血清型（毒素型）	株数
O26 : H11 (VT1)	4株	O157 : H7 (VT1+2)	17株
O26 : HNM (VT1)	1株	O157 : H7 (VT1)	1株
O145 : HNM (VT2)	4株	O157 : H7 (VT2)	2株
OUT : H2 (VT2)	1株	O157 : HNM (VT2)	3株
OUT : HNM (VT2)	1株	合計	34株

(2) 四類感染症

ア デングウイルス

(ア) 検査対象

医師からの届出により医療衛生センターが調査し、病原体検査のために採取した検体で、衛生環境研究所に送付されたもの（血液）を検査対象とする。

(イ) 検査方法

デングウイルスの非構造タンパク抗原検査（以下「NS1」という。）については、医療機関での検査が未実施の血液検体を対象に、検査キットに添付のマニュアルに従い行う。遺伝子検査は、国立感染症研究所のデングウイルス感染症診断マニュアルに準じ、検体から RNA を抽出し、リアルタイム RT-PCR 法により行う。

(ウ) 結果

令和 2 年次におけるデングウイルスの検査件数は 0 件であった。

イ 重症熱性血小板減少症候群（SFTS）ウイルス

(ア) 検査対象

医師からの届出により医療衛生センターが調査し、病原体検査のために採取した検体で、衛生環境研究所に送付されたもの（血液、鼻咽頭ぬぐい液、尿）を検査対象とした。

(イ) 検査方法

検査は、国立感染症研究所の SFTS ウイルス検査マニュアルに準じ、検体から RNA を抽出し、RT-PCR 法により行った。

(ウ) 結果

5 月に 1 事例（1 名 4 検体）、6 月に 1 事例（1 名 2 検体）、7 月に 1 事例（1 名 1 検体）、9 月に 1 事例（1 名 1 検体）、11 月に 1 事例（1 名 3 検体）の検査を実施したが、SFTS ウイルスは検出されなかった。

ウ A 型肝炎ウイルス

(ア) 検査対象

医師からの届出により医療衛生センターが調査し、病原体検査のために採取した検体で、衛生環境研究所に送付されたもの（ふん便）を検査対象とする。

(イ) 検査方法

検体を常法により前処理した後、RNA を抽出し、RT-PCR 法により遺伝子検出を行う。

(ウ) 結果

令和 2 年次における A 型肝炎ウイルスの検査件数は 0 件であった。

(3) 五類感染症

ア 感染性胃腸炎患者集団発生事例（図 1、表 3/p70）

(ア) 検査対象

高齢者福祉施設等からの届出により医療衛生センターが調査し、病原体検査のために採取した検体で、衛生環境研究所に送付されたもの（ふん便）を検査対象とした。

(イ) 検査方法

検体を常法により前処理した後、RNA を抽出し、リアルタイム RT-PCR 法によりノロウイルスの遺伝子検出を行った。また、必要に応じて、リアルタイム RT-PCR 法でサポウイルスの遺伝子検出を、IC 法でロタウイルス、アデノウイルスの抗原検出を行った。

(ウ) 結果と考察

図1及び表3に示すとおり、令和2年は、1月に4施設、2月に4施設、3月に1施設、4月に1施設、6月に1施設、7月に1施設、10月に1施設、11月に1施設の計14施設の集団感染事例が発生し、患者便48検体を採取し検査を行った。そのうち、11施設31検体からノロウイルスGII、1施設5検体からノロウイルスGIを検出した。

表3 感染性胃腸炎患者集団発生事例における病原体検出状況

月	週	行政区	施設	検体数		陽性数	検出検体
1	3	左京区	保育園	患者便	2	1	ノロウイルスGII
	3	北区	保育園	患者便	2	2	ノロウイルスGII
	4	下京区	保育園	患者便	6	6	ノロウイルスGII
	4	伏見区	保育園	患者便	2	1	ノロウイルスGII
2	6	南区	高齢者福祉施設	患者便	4	3	ノロウイルスGII
	7	下京区	高齢者福祉施設	患者便	4	3	ノロウイルスGII
	7	北区	保育園	患者便	2	2	ノロウイルスGII
	8	伏見区	高齢者福祉施設	患者便	3	3	ノロウイルスGII
3	10	南区	保育園	患者便	2	2	ノロウイルスGII
4	14	左京区	保育園	患者便	3	3	ノロウイルスGII
6	27	北区	保育園	患者便	3	0	不検出
7	29	山科区	小学校	患者便	5	5	ノロウイルスGII
10	42	伏見区	保育園	患者便	5	0	不検出
11	49	上京区	小学校	患者便	5	5	ノロウイルスGI
合計					48	36	

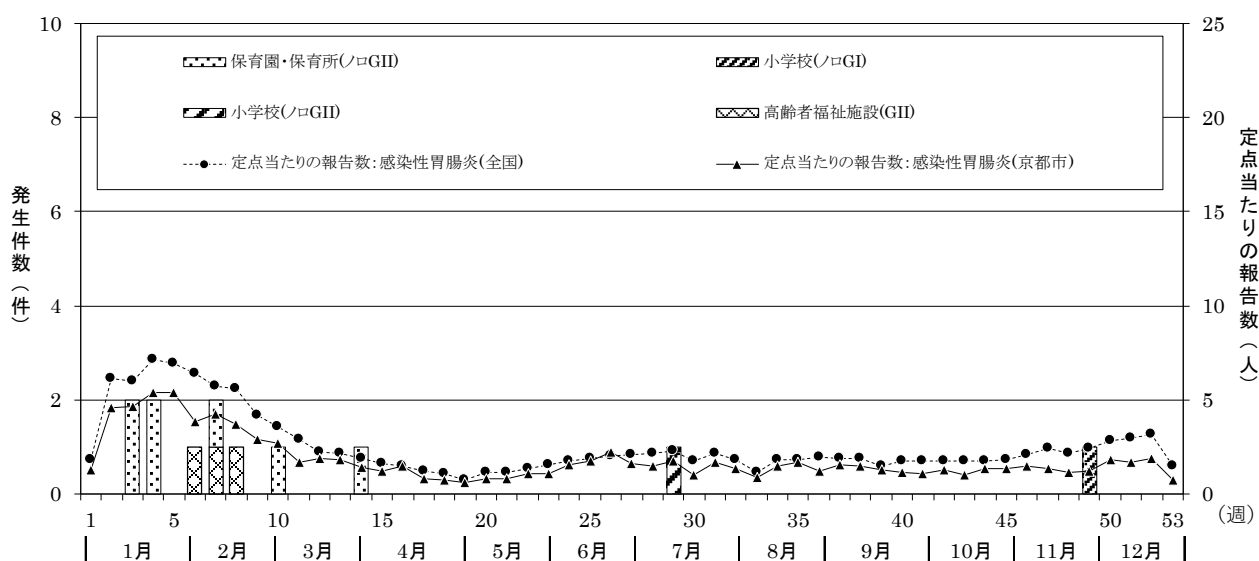


図1 感染性胃腸炎の集団発生事例における発生施設及び病原体物質別の発生状況(令和2年)

イ 麻しんウイルス

(ア) 検査対象

医師からの届出により医療衛生センターが調査し、病原体検査のために採取した検体で、衛生環境研究所に送付されたもの（鼻咽頭ぬぐい液、尿、血液）を検査対象とした。

なお、風しんとして届出のあった検体についても、検査対象とした。

(イ) 検査方法

検査は、国立感染症研究所の病原体検出マニュアル麻しんに準じ、検体から RNA を抽出し、RT-PCR 法又はリアルタイム RT-PCR 法による遺伝子検出を行った。また、培養細胞 B95a 細胞によるウイルス分離を行った。

(ウ) 結果

4 月に 1 事例（1 名 3 検体）、7 月に 1 事例（1 名 3 検体）、11 月に 1 事例（1 名 3 検体）の計 9 検体について検査を行ったが、麻しんウイルス及び風しんウイルスは検出しなかった。

ウ 劇症型溶血性レンサ球菌感染症

(ア) 検査対象

医師からの届出により医療衛生センターが調査し、衛生環境研究所に送付された検体（医療機関等で検出された菌株）について検査を実施した。

(イ) 検査方法

検査は、溶血性レンサ球菌の分離培養及び生化学的性状等検査、Lancefield 群別及び T 型別（A 群のみ）の血清学的検査を行った。検査終了後は、詳細な解析を行うため、当所で分離した菌株を溶血性レンサ球菌レファレンスセンターの地方独立行政法人大阪健康安全基盤研究所に送付した。

(ウ) 結果

3 月に 1 事例（1 名 1 検体）、6 月に 1 事例（1 名 1 検体）、9 月に 2 事例（2 名 2 検体）、10 月に 2 事例（2 名 2 検体）の計 7 検体について検査を行い、9 月の 1 事例（1 名 1 検体）から A 群溶血性レンサ球菌 T1 型を 1 株、10 月の 1 事例（1 名 1 検体）から TB3264 型を 1 株、3 月及び 9 月の各 1 事例（2 名 2 検体）から B 群溶血性レンサ球菌を 2 株、6 月、10 月及び 12 月の各 1 事例（3 名 3 検体）から G 群溶血性レンサ球菌を 3 株、それぞれ検出した。

(4) 京都市感染症発生動向調査事業における病原体検査（定点医療機関分）

ア 検査対象感染症

令和 2 年 1 月から 12 月までに病原体検査を行った疾病は、感染性胃腸炎、ヘルパンギーナ、インフルエンザ、感染性髄膜炎、咽頭結膜熱、手足口病、A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎、流行性角膜炎、RS ウイルス感染症、百日咳及びその他（不明熱、ウイルス性肺炎、肺炎）の計 13 疾病であった。

イ 検査材料

検査材料は、市内 4 箇所の病原体定点（小児科定点 4 箇所、インフルエンザ定点 4 箇所、眼科定点 1 箇所、基幹定点 1 箇所）の医療機関の協力により採取されたもので、患者 129 名から表 4 に示す検査材料について検査を行った。

ウ 検査方法

(ア) ウイルス検査

検体を常法により前処理した後、培養細胞（FL「ヒト羊膜由来細胞」、RD-18S「ヒト胎児横紋筋腫由来細胞」）を用いてウイルス分離を行った。

胞」，Vero「アフリカミドリザル腎由来細胞」）を用いてウイルス分離を行った。インフルエンザウイルスの分離には，培養細胞（MDCK「イヌ腎由来細胞」）を使用した。

分離したウイルスの同定には中和反応，ダイレクトシーケンス法，蛍光抗体法（以下「FA法」という。），リアルタイム RT-PCR 法等を用いた。

（イ）細菌検査

常法により，ふん便から下痢原性大腸菌，サルモネラ属菌，黄色ブドウ球菌などの食中毒や感染性胃腸炎の起因菌を，鼻咽頭ぬぐい液から溶血性レンサ球菌などの呼吸器感染症の起因菌の分離を行った。

表 4 検査材料別・ウイルス及び細菌別の検査実施状況

		ウイルス	細菌	全数
受付患者数		125	60	129
検査材料	ふん便	58	53	58
	鼻咽頭ぬぐい液	54	8	56
	髄液	16	3	18
	咽頭うがい液	1	0	1
	眼ぬぐい液	3	0	3
	検体合計	132	64	136
病原体検出患者数		30	15	42
病原体の検出株数		30	15	45
患者当たりの検出率(%)		24.0	25.0	32.6

エ 検査結果

（ア）月別病原体検出状況（小児科，インフルエンザ，眼科，基幹定点）（表 7/p81）

各月の受付患者数は，2 月が最も多く 24 名で，4 月及び 7 月が最も少なく各 3 名であった。年間の受付患者 129 名のうち 42 名から 45 株の病原微生物を検出し，受付患者当たりの検出率は 32.6%であった。

ウイルス検査では，被検患者 125 名中 30 名から 30 株のウイルスを検出した。被検患者当たりのウイルス検出率は 24.0%であった。検出したウイルスの内訳は，表 5 のとおりである。

表 5 検出したウイルス・細菌の内訳

アデノウイルス	1型2株, 2型1株, 3型1株, 5型1株, 41型1株	5種	6株
ノロウイルス	GI:0株, GII:5株	1種	5株
RSウイルス		1種	1株
インフルエンザウイルス	AH1pdm09型:8株, AH3型:0株, B型:10株	2種	18株
ウイルス		合計	30株
A群溶血性レンサ球菌	T-1:1株, T-B3264:1株	2種	2株
下痢原性大腸菌	EaggEC:3株, その他病原性大腸菌:5株	2種	8株
黄色ブドウ球菌			4株
サルモネラ属菌	S.Schwarzengrund:1株	1種	1株
細菌		合計	15株

検出ウイルスの季節推移をみると，例年夏季を中心に流行するエンテロウイルスは一年を通して検出しなかった。アデノウイルスについては概ね 1 年を通して検出した。

ノロウイルスは，1 月，3 月及び 12 月に検出した。

インフルエンザウイルスは 1 月～2 月に AH1pdm09 型，2 月～3 月に B 型を検出した。

細菌検査では、被検患者 60 名中 15 名から 15 株の病原細菌を検出し、患者当たりの検出率は 25.0%であった。検出した細菌の内訳は表 5 のとおりである。

A 群溶血性レンサ球菌は 3 月に検出し、下痢原性大腸菌は 1 月、3 月、8 月、10 月、12 月と、ほぼ一年を通して検出した。

(イ) 感染症別病原体検出状況（小児科，インフルエンザ，眼科，基幹定点）（表 8/p82）

受付患者数の多かった上位 5 疾病は、感染性胃腸炎の 54 名、ヘルパンギーナの 19 名、インフルエンザ及び感染性髄膜炎の 18 名、咽頭結膜熱の 14 名であった。

感染性胃腸炎は、受付患者数の 41.9%、インフルエンザ、ヘルパンギーナ、咽頭結膜熱、RS ウイルス感染症、A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎などの呼吸器疾患は、45.0%を占めていた。

主な感染症別の病原体検出率は、インフルエンザが 77.8%、A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎及び流行性角結膜炎が 50.0%、感染性胃腸炎が 35.2%、手足口病が 25.0%、ヘルパンギーナが 15.8%、咽頭結膜熱が 14.3%であった。

主な感染症について、ウイルスの検出状況をみると、感染性胃腸炎では、アデノウイルス 3 種 3 株、ノロウイルス 1 種 5 株の計 4 種 8 株を、インフルエンザでは、インフルエンザウイルス 2 種 14 株を、ヘルパンギーナでは、RS ウイルス 1 株、インフルエンザウイルス 1 種 2 株を、咽頭結膜熱では、アデノウイルス 2 種 2 株をそれぞれ検出した。

また、細菌の検出状況をみると、感染性胃腸炎では、下痢原性大腸菌 8 株、黄色ブドウ球菌 4 株、サルモネラ属菌 1 株の計 13 株を検出した。

A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎では、A 群溶血性レンサ球菌を 2 株検出した。

(ウ) 年齢階層別病原体検出状況（小児科，インフルエンザ，眼科，基幹定点）（表 9/p83）

受付患者の年齢階層別分布をみると、1～4 歳が 50 名(38.8%)で最も多く、次いで 5～9 歳の 29 名(22.5%)、0 歳の 24 名(18.6%)、10～14 歳の 21 名(16.3%)で、15 歳以上は 5 名(3.9%)であった。

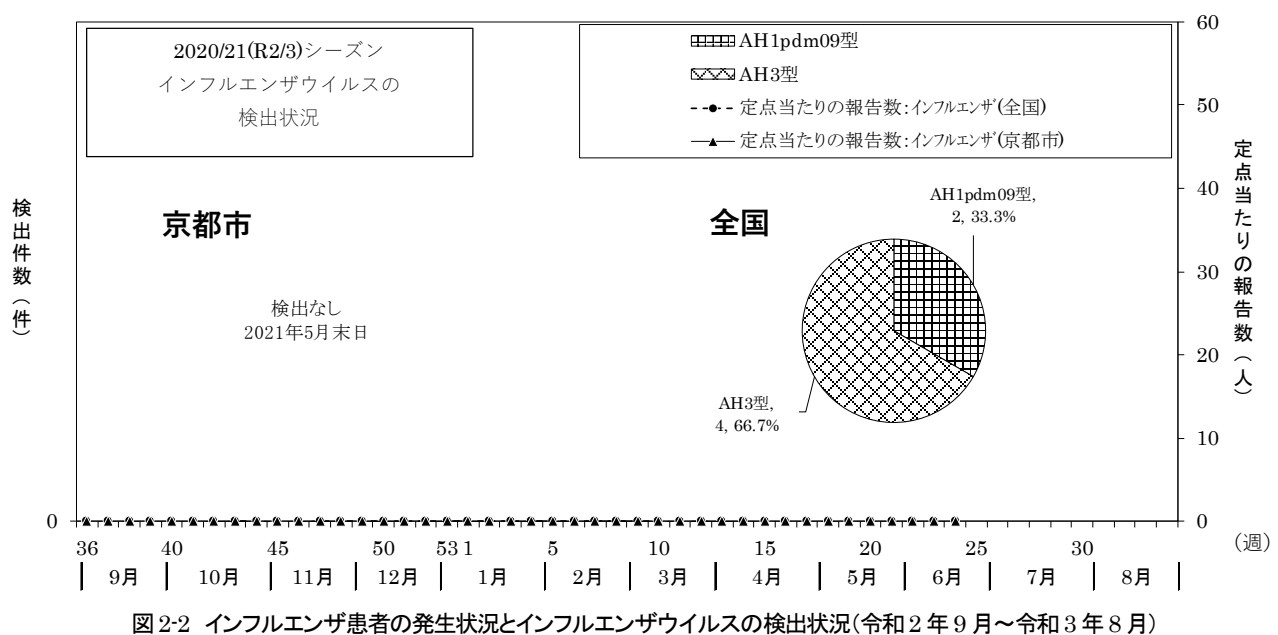
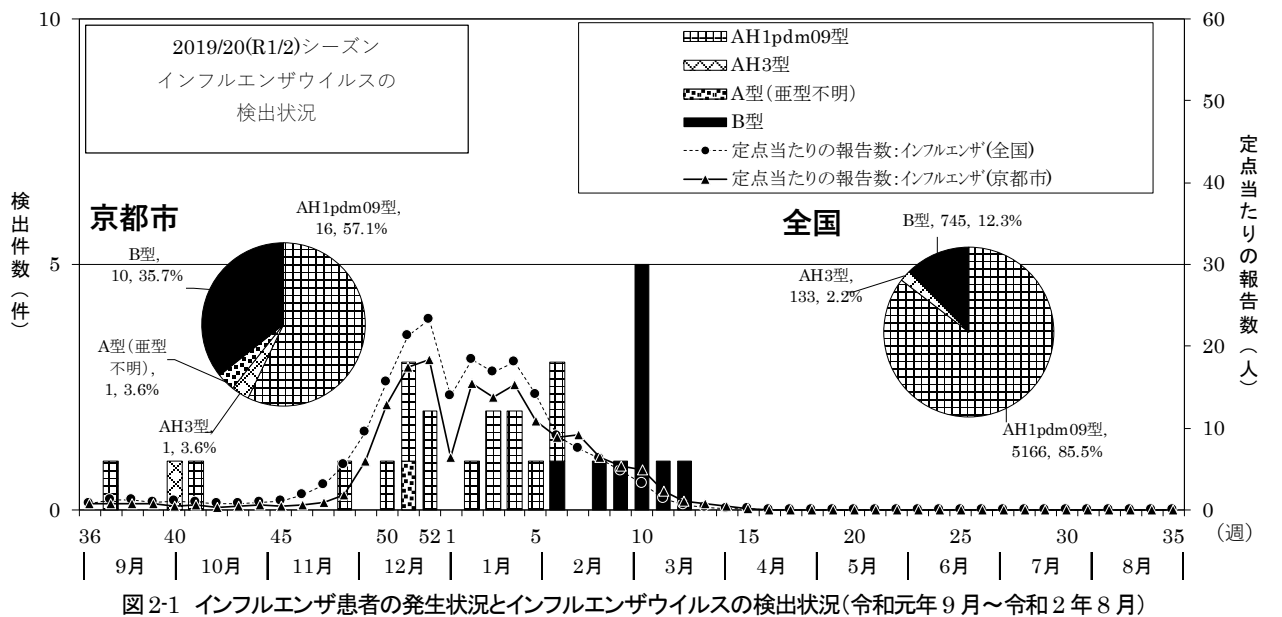
年齢階層別の受付患者当たりの検出率は、0 歳が 33.3%(ウイルス 5 種 6 株、細菌 1 種 2 株)、1～4 歳が 32.0%(ウイルス 5 種 12 株、細菌 4 種 6 株)、5～9 歳が 37.9%(ウイルス 3 種 8 株、細菌 3 種 4 株)、10～14 歳が 28.6%(ウイルス 1 種 3 株、細菌 1 種 3 株)、15 歳以上が 20.0%(ウイルス 1 種 1 株)であった。

エンテロウイルス及びロタウイルスは、全年齢で検出されなかった。アデノウイルスは 0 歳で 2 種 2 株、1～4 歳で 3 種 4 株を検出した。

インフルエンザウイルスでは、B 型を最も多く検出し、5～9 歳で 5 株、1～4 歳で 4 株、0 歳で 1 株検出した。AH1pdm09 型は、10～14 歳で 3 株、0 歳及び 5～9 歳で 2 株、15 歳以上で 1 株検出した。AH3 型は検出なかった。

(エ) 主な疾病（臨床診断）と病原体検出状況（表 7/p81, 表 8/p82, 表 9/p83）

a インフルエンザ（図 2-1, 図 2-2）



本市感染症発生動向調査患者情報によると、2019/20（R1/2）シーズンでは、インフルエンザは令和元年11月の第48週に定点当たり報告数が1.0を超え、インフルエンザの流行期に入り、令和元年12月の第52週にピークを形成後、複数のピークを示しながら緩やかに減少し、終息を迎えた。全国でも数週の差はあるものの同様の流行の動きであった。

本市でのインフルエンザウイルスの検出状況をみると、令和元年9月の第37週から令和2年2月の第6週までAH1pdm09型を16株、令和元年10月の第40週にAH3型、令和元年12月の第51週にA型（亜型不明）を各1株検出した。B型は、令和2年2月の第6週から3月の第12週までに10株を検出した。全国的にも2019/20シーズンは、AH1pdm09型の検出が多く、次いでB型であった。

2020/21 (R2/3) シーズンでは、本市感染症発生動向調査患者情報によると、定点当たり報告数が1.0を超える週はなく、そのまま終息を迎えた。全国でも同様であった。これは、令和2年から始まった新型コロナウイルス感染症の流行下で、全国的に感染症対策がなされた影響によるものと思われる。

インフルエンザウイルスの検出状況をみると、本市では、2020/21 (R2/3) シーズンにおけるインフルエンザウイルスの検出はなかった。全国でも、例年に比べるとほぼ検出がない状態であった。

b 感染性胃腸炎 (図 3-1, 図 3-2)

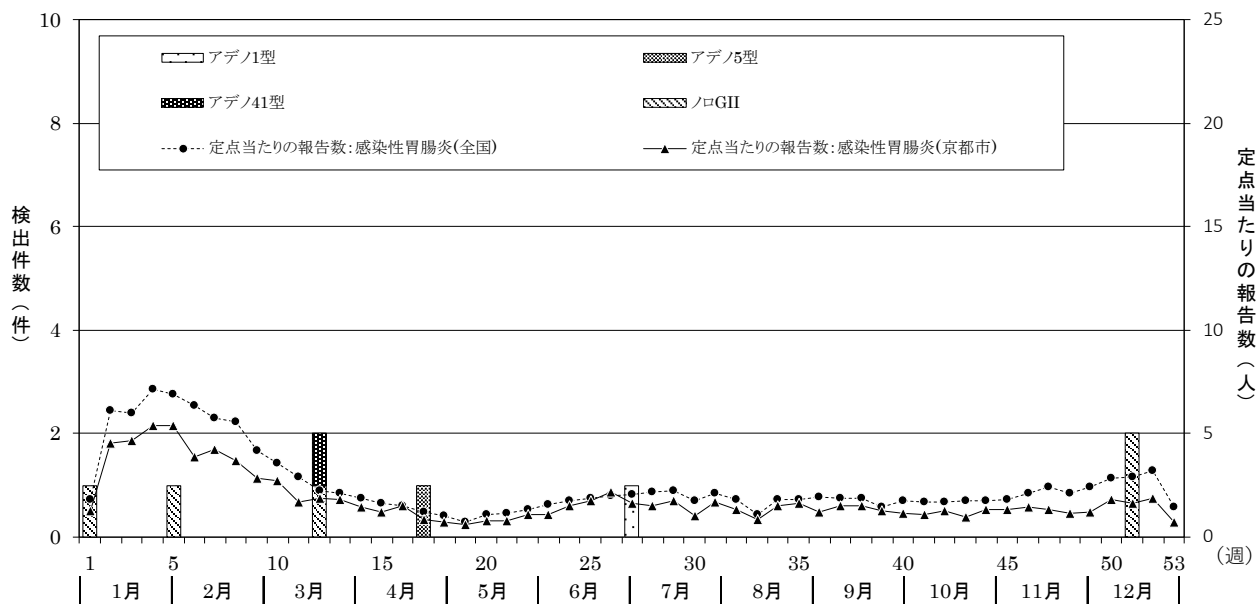


図 3-1 感染性胃腸炎患者における病原ウイルスの検出状況(令和2年)

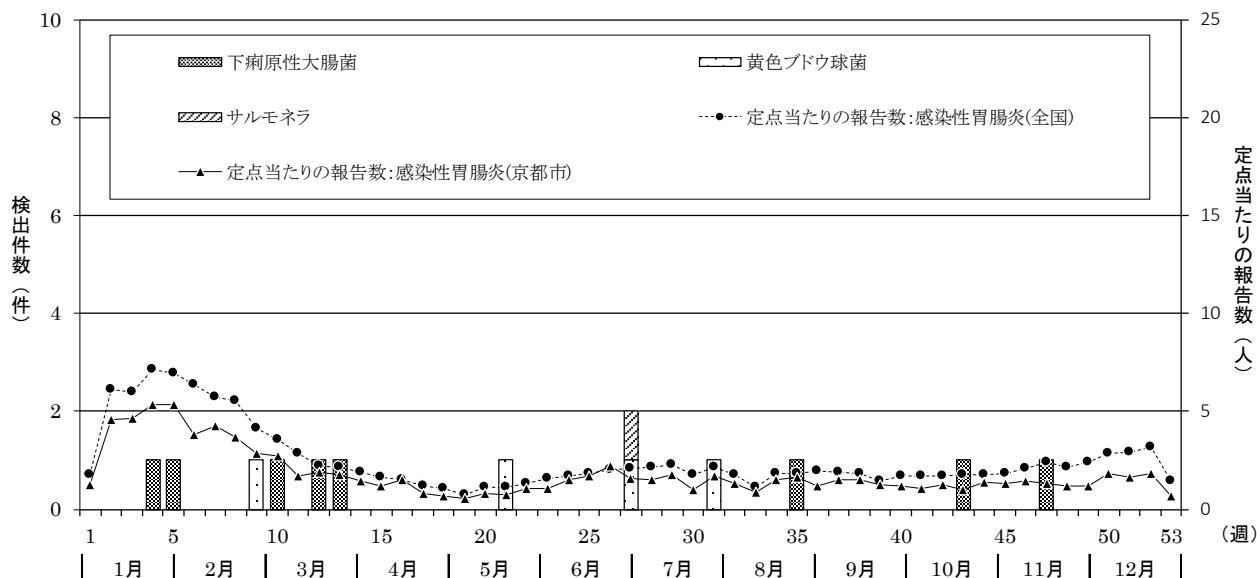


図 3-2 感染性胃腸炎患者における病原細菌の検出状況(令和2年)

全国におけるウイルスの検出状況は、ロタウイルスは殆ど検出されず、ノロウイルスは1月～4月及び11月～12月に検出数が多かった。

本市では、臨床診断名が感染性胃腸炎の受付検患者 54 名のうち 19 名からウイルス 8 株及び細菌 13 株を検出した。

ウイルスでは、ノロウイルスの GII を 5 株、1 月、3 月及び 12 月に検出し、アデノウイルスを 3 株検出した。ロタウイルス、ノロウイルス GI 及びエンテロウイルスは検出しなかった。

細菌では、下痢原性大腸菌 8 株、黄色ブドウ球菌 4 株、サルモネラ属菌 1 株を検出した。

c RS ウイルス感染症 (図 4)

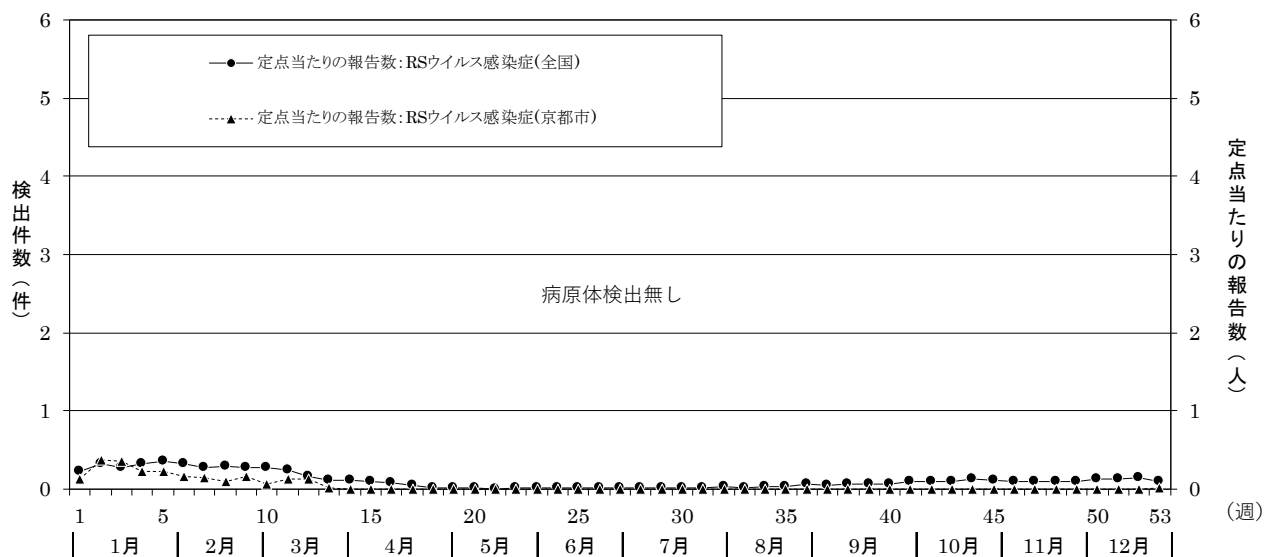


図 4 RS ウイルス感染症患者におけると病原体の検出状況(令和 2 年)

本市における臨床診断名が RS ウイルス感染症の受付検患者数は 2 名で、いずれもウイルスは検出しなかった。

d 咽頭結膜熱 (図 5)

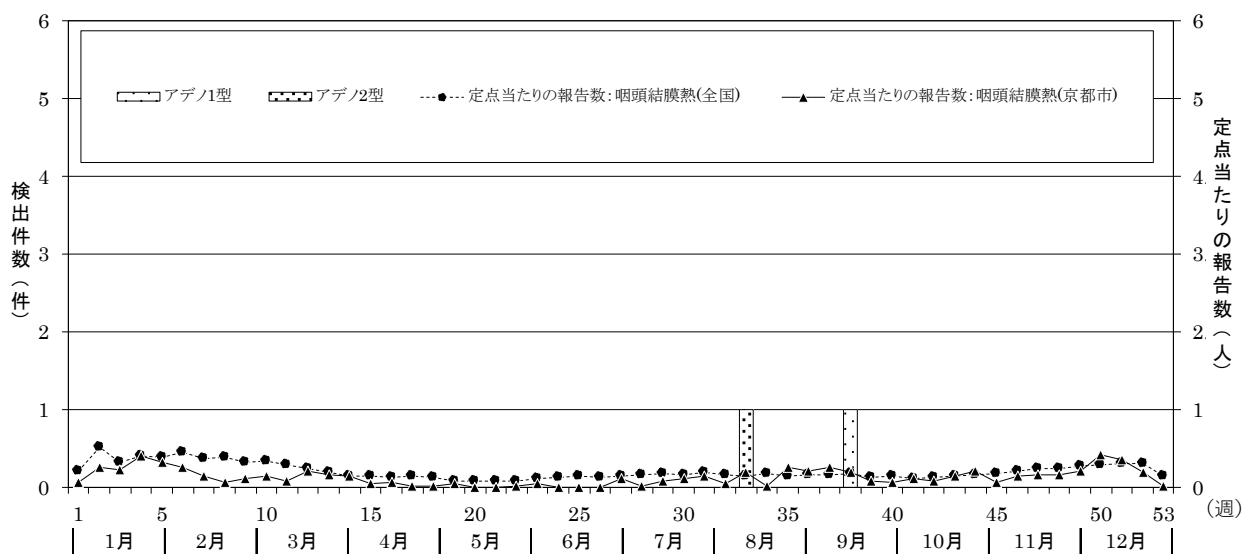


図 5 咽頭結膜熱患者発生状況と病原体検出状況(令和 2 年)

本市における臨床診断名が咽頭結膜熱の受付患者数は14名で、そのうち2名からアデノウイルス1型を1株、2型を1株の計2株検出した。

本疾病の原因とされるアデノウイルス1～7型及び11型については、受付患者全体で1型を2株、2型を1株、3型を1株、5型を1株検出した。

令和2年の全国の咽頭結膜熱におけるウイルスの検出状況では、アデノウイルス2型が最も多く35.7%、次いで1型が18.3%、3型が15.9%、5型が6.3%、6型が1.6%であった。

e A群溶血性レンサ球菌咽頭炎(図6-1, 図6-2)

本市における臨床診断名がA群溶血性レンサ球菌咽頭炎の受付患者数は4名で、そのうち2名からA群溶血性レンサ球菌を2株検出した。T血清型別検出比率をみると、劇症型溶血性レンサ球菌感染症事例で検出されることの多いT-1型の検出率は、全国で14.1%、本市は50.0%(2株中1株)であった。

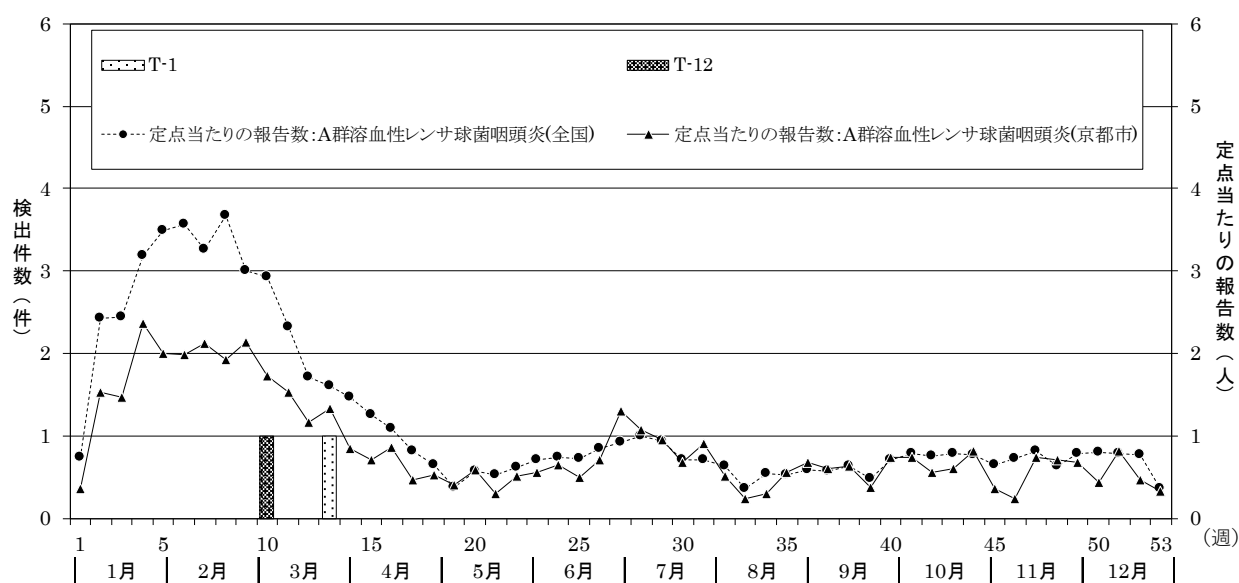


図6-1 A群溶血性レンサ球菌(T血清型別)の検出状況(令和2年)

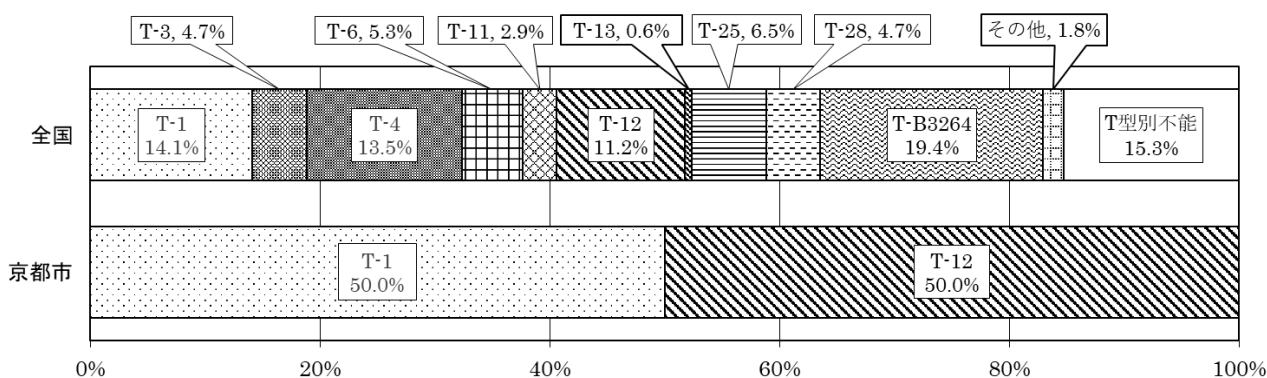


図6-2 A群溶血性レンサ球菌のT血清型別検出比率(令和2年)

f ヘルパンギーナ(図7)

ヘルパンギーナの流行は、全国では6月から増加し始め、8月(第32週)にピークを示して以降、第35週に一度増加した後に減少した。本市では、6月から増加し始めたが、ピークは見られなかった。

臨床診断名がヘルパンギーナの受付患者数は 19 名で、そのうち 3 名から 3 株のウイルスを検出した。病原体の内訳は、RS ウイルスが 1 株、インフルエンザ B 型が 2 株であった。ヘルパンギーナの原因とされるコクサッキーウイルスは検出されなかった。

全国の病原体検出状況を表 6 に示した。平成 31 年(令和元年)は、コクサッキー A 群ウイルス 6 型(36.3%)、5 型(12.4%)、10 型(4.8%)の順にウイルスが検出された。

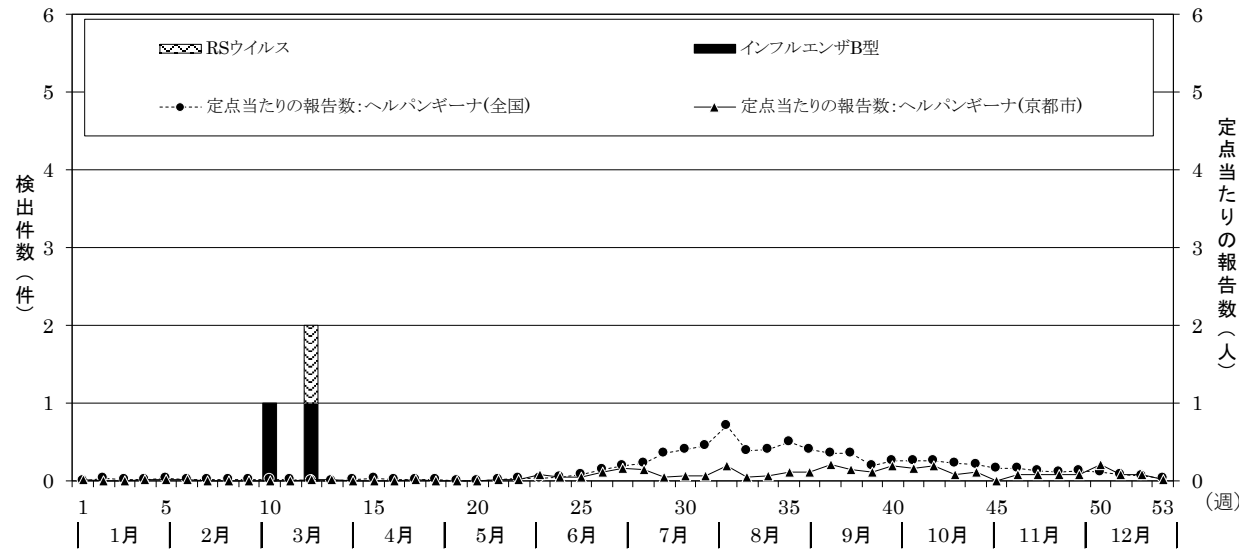


図 7 ヘルパンギーナ患者における病原ウイルスの検出状況(令和 2 年)

年	CA4	CA5	CA6	CA10	CA16	CB5	その他
2020	25	0	0	2	0	0	23
2019	18	72	211	28	19	10	223
2018	195	23	12	83	14	7	385
2017	6	14	175	137	5	3	245
2016	328	72	43	91	2	57	319

表 6 ヘルパンギーナ疾病患者から検出したコクサッキー A 群及び B 群ウイルスの型別内訳(全国)(人)

g 手足口病 (図 8)

令和 2 年は、通年で全国及び本市における定点当たりの報告数が 1.0 を超えることはなかった。

手足口病を引き起こすウイルスとしては、コクサッキー A 群ウイルス 6 型、10 型、16 型、エンテロウイルス 71 型が代表に挙げられるが、本市では、臨床診断名が手足口病の受付患者数は 4 名で、そのうち 1 名からインフルエンザウイルス B 型を 1 株検出した。コクサッキーウイルス及びエンテロウイルス 71 型は検出しなかった。

また、全国では、コクサッキー A 群ウイルス 16 型が 41 株(57.7%)、10 型が 2 株(2.8%)、その他 28 株(39.4%)の計 71 株であった。

コクサッキーウイルス及びエンテロウイルス 71 型の検出は、平成 31 年(令和元年)が 1,937 株、平成 30 年が 1,106 株、平成 29 年が 2,236 株、平成 28 年が 772 株、平成 27 年が 1,832 株となっており、隔年での流行が見られる。

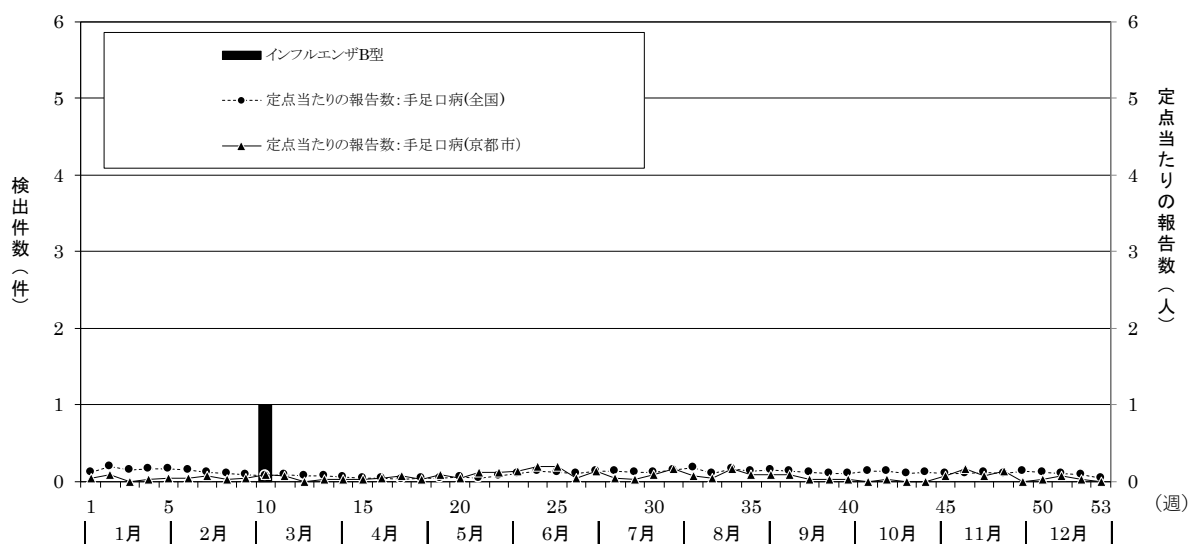


図8 手足口病患者における病原ウイルス検出状況(令和2年)

(オ) 検体別・検出方法別病原ウイルス検出状況(表 10/p84)

アデノウイルスは、1型の2株、2型の1株、5型の1株がFL細胞で、1型の1株、2型の1株がRD-18S細胞及びVero細胞でそれぞれ分離された。また、3型の1株、41型の1株は遺伝子検査によってウイルス遺伝子を検出した。

インフルエンザウイルスは、18株のうち17株がMDCK細胞で分離され、1株は遺伝子検査によってウイルス遺伝子を検出した。

ノロウイルス及びRSウイルスは、遺伝子検査によりウイルス遺伝子を検出した。

培養細胞法によるウイルスの検査体制はほぼ確立されているが、被検患者から採取した検体中に活性のあるウイルスが存在していることが必須条件となり、採取後の温度や期間等の保管条件によっては失活し検出できなくなる。また、分離困難なウイルスも存在するといった欠点がある。

感染症発生動向調査においても、迅速な実験室診断が要請される傾向は年々ますます強まっており、検出率と迅速性の向上を目指して、培養細胞法と並行して可能な限り新たな検査技術の導入を図っていかねばならないと考える。

オ まとめ

(ア) 京都市感染症発生動向調査事業における病原体検査（定点医療機関分）では、受付患者129名のうち42名(32.6%)から病原体を検出した。ウイルスでは、被検患者125名中30名(24.0%)から、アデノ、ノロ、RS、インフルエンザ等のウイルス9種類30株を検出した。細菌では、被検患者60名中15名(25.0%)から、A群溶血性レンサ球菌、黄色ブドウ球菌、サルモネラ属菌、下痢原性大腸菌の細菌15株を検出した。

(イ) 感染症別病原体の検出率は、疾病の種類により異なり、インフルエンザが最も高率で77.8%、次いでA群溶血性レンサ球菌咽頭炎及び流行性角結膜炎の50.0%、感染性胃腸炎の35.2%、手足口病の25.0%、ヘルパンギーナの15.8%、咽頭結膜炎の14.3%であった。

(ウ) 新型コロナウイルス感染症流行の影響により、例年に比べて受付患者数が少なかったため、ウイルス及び細菌

菌の検出数も少ない年となった。通常、夏から冬にかけて検出するエンテロウイルスについては、検出数が0となった。ノロウイルスは、1月、3月及び12月と、冬季に検出した。

(エ) 年齢階層別病原体検出状況では、5～9歳の検出率が最も高く37.9%で、次いで0歳の33.3%、1～4歳の32.0%、10～14歳の28.6%、15歳以上の20.0%であった。受付患者数では、1～4歳が50名(38.8%)と最も多く、比較的多種の病原体を検出した。

表 7 月別病原体検出状況(小児科, インフルエンザ, 眼科, 基幹定点)

令和 2 年 1 月～12 月

検体採取月		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計	病原体検出比率 (%)
総受付患者数		22	24	23	3	4	11	3	9	10	8	6	6	129	
検査材料	ふん便	8	6	5	2	2	7	2	7	6	5	3	5	58	
	鼻咽頭ぬぐい液	11	15	15	1		2		2	2	4	3	1	56	
	髄液	2	3	3		2	3	1	1	2		1		18	
	咽頭うがい液	1												1	
	眼結膜ぬぐい液	1					1				1			3	
病原体検出患者数		11	6	13	1	1	2	1	2	1	1	1	2	42	
患者当たりの検出率(%)		50.0	25.0	56.5	33.3	25.0	18.2	33.3	22.2	10.0	12.5	16.7	33.3	32.6	
ウイルス	被検患者数	22	22	22	3	4	11	3	9	10	8	6	5	125	
	検出患者数	9	5	10	1	0	1	0	1	1	0	0	2	30	
	患者当たりの検出率(%)	40.9	22.7	45.5	33.3	0.0	9.1	0.0	11.1	10.0	0.0	0.0	40.0	24.0	
	アデノ1型						1			1				2	4.4
	アデノ2型								1					1	2.2
	アデノ3型	1												1	2.2
	アデノ5型				1									1	2.2
	アデノ41型			1										1	2.2
	ノロウイルスGII型	2		1									2	5	11.1
	RSウイルス			1										1	2.2
	インフル インフルエンザAH1pdm09型	6	2											8	17.8
	インフル インフルエンザB型		3	7										10	22.2
	小 計	9	5	10	1	0	1	0	1	1	0	0	2	30	66.7
細菌	被検患者数	7	9	7	3	2	7	2	4	5	5	3	6	60	
	検出患者数	2	1	5	0	1	2	1	1	0	1	1	0	15	
	患者当たりの検出率(%)	28.6	11.1	71.4	0.0	50.0	28.6	50.0	25.0	0.0	20.0	33.3	0.0	25.0	
	A群溶血性レンサ球菌			2										2	4.4
	黄色ブドウ球菌		1			1	1	1						4	8.9
	サルモネラ						1							1	2.2
	下痢原性大腸菌	2		3					1		1	1		8	17.8
	小 計	2	1	5	0	1	2	1	1	0	1	1	0	15	33.3
合 計		11	6	15	1	1	3	1	2	1	1	1	2	45	100.0

表 8 感染症別病原体検出状況(小児科, インフルエンザ, 眼科, 基幹定点)

令和2年1月～12月

疾病名		感 染 性 胃 腸 炎	イン フル エン ザ	ヘル パン ギー ナ	咽 頭 結 膜 熱	手 足 口 病	感 染 性 髄 膜 炎	A 群 溶 血 性 レン サ 球 菌 咽 頭 炎	百 日 咳	流 行 性 角 結 膜 炎	R S ウ イル ス 感 染 症	そ の 他	計 （ 重 複 有 ）	計 （ 重 複 無 ）	病 原 体 検 出 比 率 （ ％ ）	
総受付患者数		54	18	19	14	4	18	4	1	2	2	4	140	129		
検 査 材 料	ふん便	53		2	2	1	1					1	60	58		136
	鼻咽喉ぬぐい液	3	18	18	11	3	3	4	1	1	2	3	67	56		
	髄液	2		1	1		14						18	18		
	咽頭うがい液				1								1	1		
	眼結膜ぬぐい液						1			1		1	3	3		
病原体検出患者数		19	14	3	2	1	0	2	0	1	0	1	43	42		
患者当たりの検出率(%)		35.2	77.8	15.8	14.3	25.0	0.0	50.0	0.0	50.0	0.0	25.0	30.7	32.6		
ウ イ ル ス	被検患者数		54	18	19	14	4	16	2	1	2	2	4	136	125	
	検出患者数		8	14	3	2	1	0	1	0	1	0	1	31	30	
	患者当たりの検出率(%)		14.8	77.8	15.8	14.3	25.0	0.0	50.0	0.0	50.0	0.0	25.0	22.8	24.0	
	ア デ ノ	アデノ1型	1			1								2	2	4.4
		アデノ2型				1								1	1	2.2
		アデノ3型									1			1	1	2.2
		アデノ5型	1											1	1	2.2
		アデノ41型	1											1	1	2.2
	ノロウイルスGII型		5											5	5	11.1
	RSウイルス				1									1	1	2.2
	イン フル	インフルエンザAH1pdm09型		8										8	8	17.8
		インフルエンザB型		6	2		1		1				1	11	10	22.2
	小 計		8	14	3	2	1	0	1	0	1	0	1	31	30	66.7
細 菌	被検患者数		54	2	0	0	0	2	4	1	0	0	0	63	60	
	検出患者数		13	1	0	0	0	0	2	0	0	0	0	16	15	
	患者当たりの検出率(%)		24.1	50.0	0.0	0.0	0.0	0.0	50.0	0.0	0.0	0.0	0.0	25.4	25.0	
	A群溶血性レンサ球菌			1					2					3	2	4.4
	黄色ブドウ球菌		4											4	4	8.9
	サルモネラ		1											1	1	2.2
	下痢原性大腸菌		8											8	8	17.8
	小 計		13	1	0	0	0	0	2	0	0	0	0	16	15	33.3
合 計		21	15	3	2	1	0	3	0	1		1	47	45	100.0	

表 9 年齢階層別病原体検出状況(小児科, インフルエンザ, 眼科, 基幹定点)

令和2年1月～12月

年齢		0歳	1～4歳	5～9歳	10～14歳	15歳以上	計		病原体検出比率（％）	
総受付患者数		24	50	29	21	5	129			
検査材料	ふん便	7	24	14	10	3	58	136		
	鼻咽頭ぬぐい液	10	21	15	8	2	56			
	髄液	7	8	1	2		18			
	咽頭うがい液				1		1			
	眼結膜ぬぐい液	2	1				3			
病原体検出患者数		8	16	11	6	1	42			
患者当たりの検出率(%)		33.3	32.0	37.9	28.6	20.0	32.6			
ウイルス	被検患者数		24	47	29	20	5	125		／
	検出患者数		6	12	8	3	1	30		
	患者当たりの検出率(%)		25.0	25.5	27.6	15.0	20.0	24.0		
	アデノ	アデノ1型		2				2		4.4
		アデノ2型		1				1		2.2
		アデノ3型	1					1		2.2
		アデノ5型	1					1		2.2
		アデノ41型		1				1		2.2
	ノロウイルスGII型			4	1			5		11.1
	RSウイルス		1					1		2.2
	インフル	インフルエンザAH1pdm09型	2		2	3	1	8		17.8
		インフルエンザB型	1	4	5			10		22.2
	小 計		6	12	8	3	1	30		66.7
細菌	被検患者数		7	24	15	11	3	60		／
	検出患者数		2	6	4	3	0	15		
	患者当たりの検出率(%)		28.6	25.0	26.7	27.3	0.0	25.0		
	A群溶血性レンサ球菌			1	1			2		4.4
	黄色ブドウ球菌		2	1	1			4		8.9
	サルモネラ			1				1		2.2
	下痢原性大腸菌			3	2	3		8		17.8
	小 計		2	6	4	3	0	15		33.3
合 計		8	18	12	6	1	45		100.0	

表 10 検出方法別病原ウイルス検出状況

令和 2 年 1 月～12 月

		検体の種類				検出 件数	培養細胞				イムノ クロマト	遺伝子 検査
		ふん便	鼻咽頭 ぬぐい液	髄液	その他		FL	RD-18S	Vero	MDCK		
ア デ ノ	アデノ1型	1	1			2	2	1				
	アデノ2型	1				1	1	1				
	アデノ3型				1	1						1
	アデノ5型	1				1	1					
	アデノ41型	1				1						1
ノロウイルスGII型		5				5						5
RSウイルス			1			1						1
イ ン フ ル	インフルエンザAH1pdm09型		8			8				7		1
	インフルエンザB型		10			10				10		
合 計		9	20	0	1	30	4	2	0	17	0	9